

「日本人研究者のための中世ラテン古文書学コース」に参加して

有光 秀行

I

今夏、筆者は、ケンブリッジ大学での、「日本人研究者のための中世ラテン古文書学コース」に参加する機会を得た。日本人研究者のみを対象としたコースが開かれたということ、また、それが、古文書学の知識を伝授するためのものであったこと、これらはおそらく、今までになかったことであり、その他いろいろなことどもとあいまって、ひじょうに貴重な経験をした、とのおもいがつよい。以下、このコースの概要を簡単に紹介し、筆者の感想を記してみたいと、思う。

このコースは、今1987年7月4日から25日までの3週間、ケンブリッジ大学のフィッツウィリアム・カレッジFitzwilliam Collegeで行われたものである。イギリス中世史の大家であり、このカレッジのマスターでもあるホルト教授Professor J C Holtを中心とした、9人の講師陣が、このために組織されていた。一方、受講者は11人。日本全国から集まった、30代前後の若手中世史研究者ばかりである。シチリア研究者が2名、あとはイギリスをフィールドとする人々であった。

つぎに、このコースでの教授内容を、簡単に紹介しておこう。

まず、第1週目。この週は、中世におけるラテン書体の変遷をつかみつつ、代表的な書体のアルファベット、諸記号、あるいは略字・連字といったどのような写本を読むにせよ不可欠な諸要素、等についての知識を得、そしてそれらに習熟すべくプログラムが組まれていた。

続いて、第2週目である。写本の書体というものは、その写本が、いつ、どこで、何

を目的として書かれたものであるかということで、大きく異なっているものであるが、このことにかんがみ、公私の文書史料あるいは記述史料という大きな分類枠のなかで、それぞれ代表的なものについて概観する一方、証書や年代記の記事などの年月日の確定のために必要な、当時の時間計算に関する諸知識、あるいは写本そのものについて、その外的特徴をいかに記述するかということ、さらに写本からの転写transcriptionをなすときの方法などを伝授する、というプログラムが組まれていたのが、この週である。

第3週目には、さらに、参加者各人の関心にあわせたプログラムが、1人1人のために用意されていた。例えば、筆者は、修士論文で、12世紀の年代記作者であるオルデリック・ヴィタリスという人の作品を扱ったのであるが、そのこと、および、年代記等がかかれた書体であるbook hand styleに習熟したい旨とを、事前に申述べておいたところ、週の前半は、オルデリック研究の第一人者であるチブナル Dr M Chibnall 先生に、オルデリックの書体その他について、後半は、ホルト教授に、やはり12世紀の年代記作者ロジャー・オヴ・ハウデンのテキストをもとに、読取りと書記の識別を、それぞれ指導して戴くことができたのであった。

また、この3週間のコースの中には、ケンブリッジをはじめ近隣の諸地域を見学する Cultural Visit、写本の閲覧を主な目的とした Study Visit というツアーも、組込まれていた。

以上で、このコースでどういうことについて教授がなされたのか、大体つかんでいたことができたと思う。さて、なぜ、このたびこのようなコースが組織され、また、それが10人を越える受講者を集めることができたのであろうか。

直接のきっかけになったのは、去年の、ホルト教授の来日であった。このときに、各地をまわられ、我が国の研究者との交流をおおいに深められた教授は、日本における西洋中世史研究の水準の高さを認められつつ、これからは、マニュスクリプトにもとずい

た研究がすすめられねばならない、と、我々にのべられた。また、イギリスにおける中世史研究の最近の研究動向のひとつとして、やはり、マニュスクリプトにもとづいたそれ、をあげることができると、これはまた別の機会に、指摘されていたのであった。マニュスクリプトにもとづいた研究、ということで、すぐ思いうかぶのは、未公開の写本を発掘し、それに拠ってなにごとかをのべる、というスタイルのものである。しかし、ホルト教授によれば、未刊行のもののみならず、刊本がでているものについても、マニュスクリプトにもどることによって、新たな知見を得ることができる、例えば、書記の習熟度や、また個々のスタイルといった点から、行政組織の中での文書製作部局の確立度をはかることができる、ということであって、なるほどこれはたしかに（編者が注記しないかぎり）印刷されたものにはあらわれてこない点である。もちろん、先にあげたようなスタイルの研究も、その重要性を失うことはないのであり、つまるところ、言えるのは、どの分野を手掛けるにしても、欧米の研究に比肩しうるものを生産し、学の世界に貢献するためには、その基礎として、写本を読む能力が必須のものとして要請されつつある、ということ、これなのである。

こうした状況のもとで今回のコースが開かれたのであるが、その授業内容、これは先程紹介した通り、ヨーロッパ中世の書体の大きな歴史のながれを把握することに始まって、しだいにそのスコープが狭くなり、最終的には各自の関心になるべく添ったテーマへ、と向かっていくものであった。ひじょうにオーソドックスといえどオーソドックスである。先にのべたように、書体というものは、かかれた場所・時代によって大きな相違を示しているのであるが、自分が習熟したいあるスタイル以外のものについての話をきく時間が、全くむだであったとは思われない。どの特定のスタイルについても、読解の鍵を教えられ（あるいは自分でつかみ）、しばらく読み続けていると、おのずと読めてくるものである、と聞く。そういう、“現場必要型”の読解ではなく、いわば体系的に、しかもあたうかぎり多くの種類のスタイルにふれえたことにこそ、このコースの一

番のメリットがあったのではないか、と思う。勿論、それら夫々のものについて完全にマスターするだけの余裕はさすがになく、これは我々自身の宿題となったわけである。

それから、このコースのメリットについて述べるとき、おとしてならないのが、すばらしい講師陣のことである。超ヴェテランの先生方の、ヴェテランらしい授業は言うに及ばず、30代位の若い先生方の熱のこもった授業にも、わすれがたいものがあり、彼らの精力の旺盛なこと、つい怠惰な方向へと流れがちになる筆者は、鼓舞され続け、ある種の感銘さえも、抱いたことであった。

ホルト教授をはじめとするイギリス人の諸先生方との交流がもてたことはもとより、3週間寝食をともにすることで、我々日本人研究者の間にも親密な関係が成立したこともまた、大きな財産となったことを記しておきたい。夜おそくまで、あるときはともに予習・復習に励み、またあるときは様々なテーマについて意見を交換しあい、と、寄宿舎制の最大のメリットのひとつはこういうところにあるのだ、と実感した次第である。ホルト教授は、フェアウェル・ディナーでのスピーチのなかで、今後は日本で、今回の温習がなされていくことを希望する旨、発言されていた。筆者も、できれば、我々のサークルが一層広がっていくようなかたちで、それがなされることを望んでやまないのである。

Ⅱ

——— 成程。今回のコース全体の、位置づけとか感想について書いてもらったのだけれど、こんどは、細かいことや、もっと私的なことでもいいから、ざっくばらんに、印象に残ったことをきかせてください。

ハイ。そうですね、なまのマニュスクリプトを、じかに手にふれてみるというのは、

僕にははじめての経験だったのですが、これはちょっと強烈なものがありました。たしかマッキタリック先生（書体史等を担当された）の授業の、第1時間目だったと思うのですが、先生が所蔵しておられるという写本の断片を回覧に付されたのです。それは、こんな小さな一数センチ四方の一ものでしたが、またそれに細かい文字が、ゴシック書体で、丹念にきざまれていました。それを手にしたとき、これを書いた書記の、何といひますか、魂ばく、人の気配とでもいいでしょうか、それが、この断片から、むううっとたちのぼってくるような気がしたのです。

———何だかオカルトじみてきましたね（笑）。

そうですか（笑）。本当に、なんといひますかね、たとえば、上野の国立博物館に、昔の衣類を展示してある一角がありますでしょう、小袖とか。あそこで受ける感じと、似たところがありました。あと、ロンドンの国立公文書館Public Record Officeの見学をはじめ、何回かなまの写本にふれる機会がありましたが、これはやはり現地で学ぶメリットだったといえましょうね。ただ写本を現地でみるということそのものは、こういうコースでなければできないということではないので、さっきはとくにふれませなんだが、短い期間にいろいろな種類のものを目にできたということは、この機会ならではのことだったとおもいます。

———他に印象深かった写本は？

おなじケンブリッジの、コーパス・クリスティ・カレッジには、パーカー・コレクションという有名な写本のコレクションがあるのですが、その中の、マシュー・パリスという、これは13世紀の年代記作者なんですけど、この人の『大年代記』の写本、これはまたわすれがたいものです。たしか、ロンドンからイエルサレムへの行程図だったとおもうのですが、これまた丁寧に書きあげられたもので、彩色なども実に見事なものでした。それから、この図そのものが、一瞬これはなんだろうと考えさせられてしまうようなもので、これを現した精神、あるいはこれに現れた精神というものには大いに心ひ

かれるものがありました。そういう点でも、今回の写本見学の中では、ひとつのハイライトでしたね。

それから、今、精神ということがでたので、ちょっと余談になりますが、つけくわえさせてもらおうと、先日、篠田浩一郎先生の『形象と文明』（白水社、1977）を読んでいたら、書体と、それを用いている「一時代のメンタリティーとのあいだには、対応関係がある」と指摘した研究があるのだそうで、これと、最近邦訳のでたパノフスキーの『ゴシック建築とスコラ学』、また音楽研究などとをからめあわせて、西洋中世の時代精神について考察した一文が収められていました。ケンブリッジのコースでならったことは、ほとんどが、いかに正しく文字を読みおこすか、に關することであって、そういう「読みかた」は教えていただけなかったこともあり、興味深く読んだことでした。

——— ところで、コースが終わってからは、イギリスをしばらく旅行したあと、フランスに行ったそうですが。

はい。ほとんどパリにいました。

——— 一説によれば、国立図書館で、写本にほおずりしていたとか（笑）。

それはデマです（笑）。書いた文のなかで少しふれましたが、オルデリック・ヴィタリス、この人の自筆写本のいくつかがここにはいっているので、それを見せてもらいでかけました。それはですね、こちらまんざら知らないひとでもないから — って、こういういいかたはちょっとなれなれしすぎますか（笑） — 、ああ、この羊皮紙を彼もさわったのだな、と思うと多少不思議な感じはしましたし、また彼のきざんだ一字一字が、時には勢いよく、インクもたっぷりつけて、また時には所々かすれたり、また最晩年には震えはじめたりもしている、そうした文字の群れが、あるいは、それらもちいて彼が思うところを刻みこんでいった羊皮紙の束が、さらに、その述べるところのものをきこうと、何百年にわたって、彼の写本をたずねた幾多の人々が遺した手垢さえ、

じつにゆかしいものにおもえてくる，そういうことはありましたよ。だけど，ほおずりは，不可能だとおもいますよ（笑）。やっぱり貴重な文化財ですから。写本室内は，ペン類は使用禁止ですし，それから，最初，写本を机の上にひらげて読んでいたら，書見台をつかうようになって，注意されましたものね。あれは，製本が痛まないようにということなのかな，だけど，館の人もよくみてます。

——— 成果のほうはどうでしたか。

それは，かよえた日数はわずかなものでしたし，ほとんどおがんできただけです。ただ，ちょっとこまかい話になりますが，いくつか出してもらった写本のなかで，オルデリックが生きていた時代に，彼のいた，ノルマンディ南部のサンテヴルー修道院というところ，ここで書かれたいろいろなものをあつめた本があったのです。多くの人の手がそこにはみられますが，ところどころにオルデリックのものもあるので，そのうち多少気になるところをノートに転写してみました。「書記の手を区別する」ことの応用編をやったわけです。よく似ているが，違うようにも思われるものの区別 — 習ったところがおなじだと，手も似てくるというのはおわかりいただけでしょう。これを利用して，写本の製作場所まで同定しうることもあるのですから — ，これはなかなかむづかしいことでした。先程すこしふれましたが，同一人物でも，年とともに書体のうえて微妙な変化がみられる，ということもあるわけですし。ちなみに，オルデリックの場合の鍵のひとつは，彼において独特の書かれ方をする文字をみつけ — たとえば“g”がそうなのですが — ，その文字をじっくり比較する，ということでした。ちなみに，この写本は，点鬼簿とか蔵書目録，カレンダー，時間の計算についての説明またそれに関わるさまざまな図表，あるいは編年記（*Annales*）などなどからなっているもので，面白いものです。時間計算の図表など，どうつかうのかいまだよく理解できない，一寸不可思議なもので，そのうち，じっくり取り組んでみたいものです。

——— 頑張ってください。

〔東京大学大学院・人文科学研究科〕